

令和3年度 鹿屋中央高等学校入学試験問題

国語

注意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて八ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 3 受験番号は、解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 4 答えは、問題の指示に従って、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

受験 番号	
----------	--

次の1・2の問いに答えなさい。

1 次の——線部①～⑥のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書け。

電車のウンチ^①ンは前日調べておいた。遊園地に着き、凍^②えた手をこすりながら案内図を見て、全体を把握^③した。歩き出すと、かわいらしいキヤラクターが楽しげなスンゲキ^④を披露している。私たちは幾つもの乗り物に乗った。帰りになり、空が夕焼けにソ^⑤まる中、私たちは観覧車の堅固^⑥な骨組みに見とれた。

2 次の行書で書かれた漢字をそれぞれ楷書で書いた場合、総画数が「勢」と同じになるものはどれか。次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 適^{イフ}
イ 複^{ウツ}
ウ 演^{エイ}
エ 絹^{イヌ}

次の文章を読んで、あとの1～5の問い合わせに答えなさい。

——我々は自分の脳の限界を超えないのだろうか？

素直に諦めてしまいそうですが、これはひょっとするとできるのかもしれません。

「知らない情報はグーグルで検索すればいいし、いつでも検索できるから憶^{おぼ}える必要もない」と考える人が増えている、という統計があります。

現代人はインターネットを自分の脳に対してもう自分の頭で何でも覚えたり、判断したりしようとは思なっていて、もう自分の頭で何でも覚えたり、判断したりしようとは思わないともいいんだと考えているというわけです。私は、この「グーグル効果」こそが、脳の限界突破のカギなのだとみています。

検索プログラムが必要とされる背後には、インターネット上を行き交う膨大な情報量の存在があり、そこから有効な情報を効率よく吸い上げる検索プログラムの中核には、最新の人工知能の働きがあります。

仮に、インターネットとつながった人工知能を「外部脳」と呼ぶとして、その外部脳の助けを借りれば、人類の脳の進化だけだと何万年もかかってしまう処理スピードや記憶容量のアップも、これを短期間で実現できそうです。

問題は、外部脳と生身の脳をダイレクトに結びつける方法ですが、それさえできれば、外部脳は圧倒的なデータ量と知能を武器に生身の脳を支援し、これまで想像できなかつたような複雑で抽象的な概念まで生身の脳に伝えてくれる、ということになるわけです。

——だが、いつたいどうやつて？

これが出来ないと、私たちの生身の脳は、結局はコンピュータから一旦アウトプットされた情報をあらためて自分の五感を通して受け止めるしかありません。そもそも、外部脳の得た複雑な情報を、生身の脳は本当に理解できるのでしょうか。

そのヒントになるのは、数学者や物理学者が高次元の幾何学图形を理解する方法です。

3角形でも5角形でも、2次元の広がりをもつ幾何学图形は、誰でも頭の中で自在に回転させることができます。皆さんも、3角形を180度回したり、5角形を90度回転させたりするくらいは、この場で图形を思い浮かべながら瞬時に行なえるでしょう。

□ a 、ピラミッド（4角錐^{すい}）やサイコロ（立方体）のような3次元图形を頭の中で自由自在に回転させることができるのは、さほど多くありません。頭の中で立体をグルグルとまわして、各面相互の位置関係を見失わないのでいることは、2次元の3角形や5角形を回転させるのに比べるとかなり骨であることは実感してもらえるはずです。

b、もう1次元増えて4次元になると、その昔、天才アインシュタインだけが「宇宙は4次元の時空からできている」と看破できたことからもわかるように、ほとんどの人がイメージできなくなってしまいす。

そして、たとえば現代物理学の最先端では、「宇宙には11次元の広がありがある」という説が有力なのですが、11次元という高次元の広がりをもつた幾何学図形となると、そのまま頭の中でイメージすることはもはや誰にもできません。

しかし、数学者や物理学者は、その「断面」を理解することで全体像を想像しています。11次元の図形を想像上のナイフでスパッと切つてみると、その断面は広がりが1次元減つて10次元になります。これは、立体（3次元）を切ると、その断面がかならず平面（2次元）になつているのと同じです。

だから、10次元をもう1回切るとその断面が今度は9次元になり、次は8次元になり……。そうやってどんどん切っていくと、11次元の図形であつても、普通の人間が理解できる3次元や2次元が見えてきます。^②

こうした手法によつて、11次元の宇宙空間や図形全体をいつぺんにイメージはできなくとも、さまざまの断面から11次元を観察することにより、次第に全体像がイメージできるようになるわけです。

これは幾何学の例ですが、このように脳の限界を乗り越える方法が数学言語には存在します。将来、外部脳はその獲得した知を、同様にさまざまな「切り口」から少しづつ難度を下げた問題に切り分け、生身の脳に宇宙や生命の秘密を教えてくれるのでしょうか。

- しかし、新人類^④と言えるほどの「脳力」を本当に獲得できるかどうか。それはまさに「神のみぞ知る」というところなのでしょう。
- （竹内薰「文系のための理数センス養成講座」による）
- 1 線部①と同じ品詞のものを、本文中の線部ア～工の中から一つ選び、記号で答えよ。
- 2 文章中の **a**・**b** にあてはまる語の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。
- ア (a すると b しかし) イ (a ところが b さらに)
ウ (a ただし b さて) エ (a ところで b つまり)
- 3 線部②とは、どのような手法か。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。
- ア 高次元の広がりをもつた幾何学図形を頭の中でそのままイメージしようと/orするのではなく、3次元や2次元の図形に似たものとしてその全体像を想像する手法。
- イ 高次元の広がりをもつた幾何学図形を切った一つの断面をイメージし、その断面を細かく観察することにより、次第に全体像をイメージできるようにする手法。
- ウ 頭の中でイメージすることができない高次元の幾何学図形の、断面を考えることで次元を1つずつ減らし、さまざまの断面から図形の全体像を想像する手法。
- エ 頭の中でイメージすることができない高次元の幾何学図形を、想像したナイフで1回切つて次元を1つ減らすことで、普通の人間に見える図形にする手法。

4 線部③を、どのような人々であると筆者は考えているか。次の文の I・IIに入る最も適当な言葉を、本文中から I

は十五字、IIは十三字で抜き出して書け。（符号も一字と数える。）

自分が知らない情報はいつでもインターネットで I と考えており、IIを感じていないかもしない人々。

5 線部④にあるが、次の文は、それがどのような「力」であるかを説明したものである。Iに入る適当な言葉を、「脳の進化」「抽象的な」という言葉を使って、六十五字以内で書け。

外部脳の助けを借りることで、II力。

3 次の文章を読んで、あととの1～4の問い合わせに答えなさい。

(注)白河院の御時、九重の塔の金物を、牛の皮にて作れりといふこと、世に聞えて、修理したる人、定綱朝臣、ことにあふべき由、聞えたり。(処罰されるらしい)

仏師なにがしといふもの召して、「たしかに、まこと、そらう」とを見て、ありのままに奏せよ」と仰せられければ、承りて、上りけるを、(途中半分)のほどより、帰り下りて、涙を流して、色を失ひて、「身のあればこそ、ぐらい行つたところで

君にも仕へ奉れ。肝心失せて、黑白見分くべき心地も侍らず」といひもやらず、わななきけり。君、聞こしめして、笑はせ給ひて、ことなる沙汰なくて、やみにけり。

かの韋仲将が、凌雲台に上りけむ心地も、かくやありけむとおぼゆ。

(注)時人、いみじきをこのためしにいひけるを、顕隆卿聞きて、「こやつは必ず冥加あるべきものなり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、をこのものとなれる、(見事な氣の回し方だ) やんごとなき思ひはかりなり」とぞほめられける。

(「十訓抄」による)

(注)白河院・白河上皇。

九重の塔(京都にあつた法勝寺の塔)。韋仲将が、凌雲台に上りけむ心地(中国の魏の國の韋仲将が、高樓の額を書くため七、八十メートルの空中につり上げられたが、地上に戻ると恐ろしさで白髪になつていたという話に基づく)。

1 線部①「いふこと」を現代仮名遣いに直して書け。

2 線部②と同じ人物を表す言葉を、本文中から抜き出して書け。

3 線部③の現代語訳として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア こう、歩きながら書いていたのだろうと考えられる。

イ 誰かが書いたものが今に伝わっていることのようだ。

ウ ゼひこのようにありたいものだと感じられる。

エ ちょうどこのようであったのだろうかと思われる。

4 次は、本文について話し合っている先生と生徒の会話である。

□ I → □ III に適當な言葉を補つて会話を完成させよ。ただし、□ I ・ □ III にはそれぞれ十字以内でふさわしい内容を考え、現代語で答え、□ II には本文中から最も適當な九字の言葉を抜き出して書くこと。

先生 「定綱が処罰されるらしいということになりました。そこで、ある仏師が呼ばれて、『確かに、□ I 、正直に申せ。』と命じられましたが、このあと意外な展開になりますね。」

生徒A 「この仏師は塔の高さに恐ろしさを感じたようですね。それ

はともかく、定綱に対してこれといった処罰のなかつたことが、『□ II 』という言葉からわかりますね。」

生徒B 「この話を聞いた顕隆は、仏師が処罰の件を知つて、自分が、『□ III 』をしたのだと考えましたね。なるほど、そう考へてみると、この仏師はかなり考への深い人かもしないですね。」

4

次の文章を読んで、あととの1～5の問い合わせに答えなさい。

「樋口さん、破水しました。そろそろ始まります」

「はいっ」

ゴム手袋をきつちりはめて、分娩室へと足早に向かう。この緊張感が和美は好きだ。新しいのちの誕生の瞬間。妊婦さんとそのご家族といっしょに、人生のたいせつな一瞬を共有させてもらえることに、無上の喜びを感じていた。

「樋口さん、もうすぐ赤ちゃんに会えますよ。がんばりましょうねえ」

「は、はい」

樋口さんは額に脂汗を浮かべている。ここまでくるのは大変だった。何度も切迫流産の危機に直面し、緊急入院を繰り返してきた。やっと三十二週目にこぎつけた。少々小さいかもしれないけど、もう生まれても十分育つだろう。

「おれもついてるからな。がんばれよ」

枕元で手を握っているパートナーの顔は、言葉の勇ましさとは裏腹に、真っ青だ。血を見て倒れなきやいいけど。そつちのほうが心配だ。「いた、いたいっ」

樋口さんの体が弓ぞりになる。子宮口は全開だ。だけど赤ちゃんの頭が大きいのか、なかなか出てこられない。

「大丈夫ですよ。はい、もう一度、吸ってえー、吐いてえー」

お産のたびに思うのだが、赤ちゃんはすごい。あんなにちっちゃくて、ちゃんと自分の意思と力とで生まれてくる。ゆりかごのように快適だったお母さんの胎内を離れ、せまく暗い産道を通り抜けての見知らぬ世界への旅。それは、赤ちゃんにとつてものすごい大冒険のはずだ。それをあのちっちゃな体でやりとげる。

いよいよ生まれるというときがくると、赤ちゃんは頭蓋骨の裂け目をわずかに重ね合わせて頭を小さくし、まるでドリルのように体を回転させながら、ゆっくりと時間をかけて産道をおりてくる。その神秘さには、毎回心を奪われる。そして、生まれてた瞬間の、あのまるでお地蔵さんのようなおだやかな顔。お腹の中でも十分に育った赤ちゃんは、ぷつくりふくらんだほつぺたが出口でつつかえたりして、それがまたキュートで思わず笑ってしまう。

お父さんとお母さんには悪いけど、真っ先に赤ちゃんに会えるのは、看護師の□だ。和美は、「初めてまして。よくきたね」と、心の中で話しかける。続いて、「オングヤアー！」周囲に光をばらまくようなあの歓喜の産声。やつたよ！　生まれたよ！　輝かしい自己肯定の叫びだ。

「生まれましたよ、樋口さん。よくがんばりましたね。おめでとうござります！」とつても元気な女の子ですよ」

生まれたで、まだぬれていいる赤ちゃんの体を、樋口さんの胸に抱かせてあげる。こうすることで母子の絆はぐつと深まる。樋口さんの目じりから、透明な涙が幾筋も伝つて落ちた。

「かわいいーい」

泣きながら笑つてゐる樋口さんにほおを寄せるパートナーの目にも光るものがあった。その神々しさに疲れが吹つ飛ぶ。赤ちゃんと妊婦さん、二人のいのちを預かつていた重圧から一気に解放される。ああ、無事に生まれてくれてよかったです。ありがとうございます！　と万物に感謝したくなる。

産湯をつかわせ、体重を量る。千九百八十グラム。よかつた。ここまで育つていれば大丈夫だろう。

子どもは、天から降ってきた天使だ。産着にくるまれた赤ちゃんを見たび、そう思う。生まれたての赤ちゃんの表情には、天使のころの名

残がある。まるで天上の人のように神々しくて神秘的。できぱきと産後の処置をこなしながら、和美は小さな両手を合わせて、まだ見えない目で一生懸命に周囲を見回している赤ちゃんに見とれる。

生まれて二、三時間で赤ちゃんははつきりと覚醒する。そして知性的とも見える表情で、しつかりと両親と目を合わせる子もいる。まだ見えてはいないはずの無垢な瞳に見つめられて、なりたてほやほやの新米パパとママはたちまち虜になる。そんな様子を見るたび和美は、赤ちゃんの生きる力の強さと知恵とに舌を巻く。^(注)徒手空拳でこの世に生まれてくる赤ちゃんにとって、親の愛は命綱だ。赤ちゃんにはちゃんとそれがわかっている。

「お疲れ様でした」

仲間の看護師がいれてくれたコーヒーを前に、しばしのコーヒーブレイク。和美は「ほーっ」と長い息を吐きながら、ほんやりした視線を窓辺に遊ばせる。緊張の連続だった数時間が終わると、いつもこんなふうに放心してしまう。窓の外のいちょうが芽吹きはじめていた。ふと気になつて腰を浮かせて確かめると、ほんの一センチほどの芽は、やつぱりいちょうの形をしていた。生まれたてのいちょうの赤ちゃんだ。「かわいいーい」。思わず声にだして微笑んだ。

(八束澄子「いのちのパレード」による)

(注) 分娩室=病院で、子どもを産む部屋。

切迫流産=流産が始まりかけている状態。

徒手空拳=手に何も持つておらず、自分の身一つであること。

1 ——線部①とあるが、このときの「パートナー」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 妻と、生まれてくる子どものことを心配して、動搖する気持ち。

イ 今までに経験してきた、数々の苦労や危機をかみしめる気持ち。

ウ 自分さえいれば妻も子どもも大丈夫だと、自信を強める気持ち。

エ 自分が気を失つてしまふのではないかと、心配している気持ち。

2 ——線部②とあるが、和美がこのように思うのはなぜか。次の文の□に入る適當な言葉を、「大冒険」という言葉を使って、六十五字以内で書け。

赤ちゃんが、□から。

3 本文中の□にあてはまる語として、最も適當なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 一存 イ 人徳

ウ 役得 エ 策略

4 ——線部③とあるが、生まれた子どもと、その家族を前にして、和美はどういう気持ちになつたか。次の文の□・□に入る最も適當な言葉を、本文中から□I□は十二字、□II□は十字で抜き出して書け。

家族の神々しさをまのあたりにして疲れを忘れ、自分が赤ちゃんと妊婦さんの□I□から自由になり、本当によかつたと□II□気持ち。

5 ——線部④とあるが、和美は、どのようなことに対し感心しているのか。最も適當なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 赤ちゃんのまだ見えていないはずの無垢な瞳に見つめられ、新米のパパとママが自分たちの責任について初めて考えること。

イ 親の愛が頼りであることを理解している赤ちゃんが、知性的ともいえる表情でその愛をしっかりとつなぎとめていること。

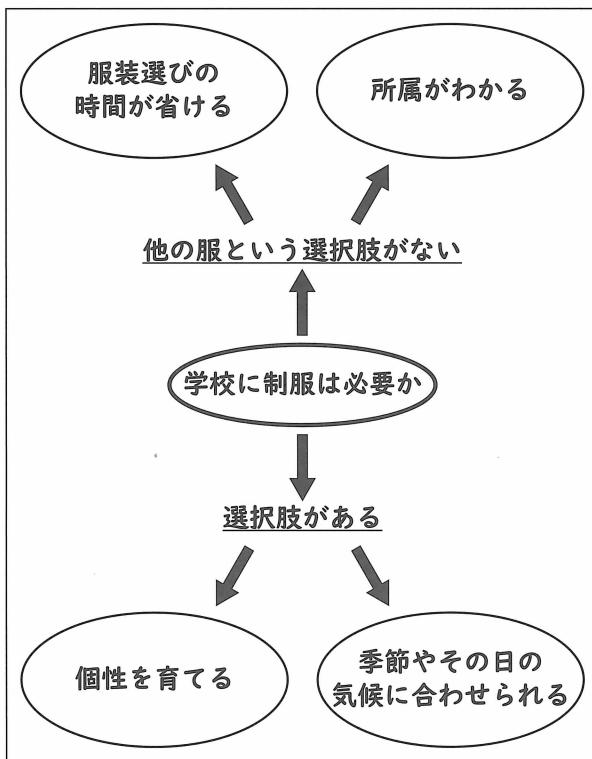
ウ 何も持たずにこの世に生まれる赤ちゃんにとって、自分の親の愛は命綱と言えるほど、唯一頼りになるものであるということ。
エ まだ生まれたばかりの赤ちゃんが、新米のパパとママと見つめ合つたあとに、親の愛が命綱であることを理解し始めていること。

資料1は、「学校に制服は必要か」についての議論をするにあたつて、中学生の川田さんが考えたことを事前にまとめたメモである。また資料2は、同級生の青木さんと実際に議論をしたときの記録の一部である。資料2の空欄に入るよう、後の条件に従つて文章を書きなさい。

条件

- (1) 一段落で構成し、六行以上八行以下で書くこと。
- (2) 解答の最初は一字空け、原稿用紙の正しい使い方に従つて、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (3) 書き出しは、「一つ目は」とすること。

資料1



資料2

青木さん

「私は、学校に制服は必要ないと考えます。私服ならば、服に選択肢があり、自分の着る服を自分で選ぶことができまます。人間には、個性が大切です。それは、学生でも同じです。皆が同じ制服を着るのではなく、一人一人が自分に合った服装をすることは、個性を育てることにつながると思うので、制服は必要ないと思います。」

川田さん

「私は、学校に制服は必要だと考えます。制服の良い点は二つあります。」

青木さん

「川田さんが具体的に説明したように、確かに中学生は毎日忙しく、無駄な時間を省きたくかもしれません。でも、毎日服を選ぶことも、社会の中で生きしていくために必要なことはないでしょうか。また、周囲の人から見守られている安心感というのもわかりますが、そのため、個性を失つてしまふというのは、もつたいないことではないでしょうか。」